



# 中高生とともに差別と闘う

## 『逆KY』

吉成タダシ



前号で、発表すること、応えること、違うことの楽しさ、対話の可能性を諦めないこと、そして、共に学ぶことについてお話ししました。もう少し。

### 「空気を読む(逆KY)」原因は

人権学習をしていると、小学校や国語の授業の流れでしょうか、「○○さんと同じで——」とか、「○○さんと同じで——」とか、「○○さんと同じで——」と、「○○さんと同じで——」と、友達が発言の一部を取り出して意見を述べる子に出くわすことがよくあります。

また、どうしても自分の言いたいことがある子なんかは、「ちよつと話が変わってしまうかもしれないんですけど——」と、何とも控えめな前置きをしつつも、したたかに自分の意見を述べる子も現れ、対話のバリエーションの豊かさが感じられることがあります。

その一方で、同じような考え・意見ならば、自分の発言はせず、周囲の空気を読むことばかりに気を取られているように感じられることもあります。ましてや自分と違った意見や反対意見なら、「黙ってじつとしておこう」と、平静を装い、息を詰めて周囲の動向を伺っているように感じられることもあります。つまり、その場の空気を必要以上に読むことに終始し、言いたいことがあっても黙ってしまうのです。これでは知り合うことも違いを認め合うこともできません。そんな逆KYの原因はどこから来るのでしょうか——。

### 「逆KY」からの解放

「数学嫌い」とか、「理系嫌い」と言われることがあります。専門科目である私としては耳の痛い話です。でも、何とか汚名返上したいと思っ

ています。その為にあれやこれやと工夫を試みるのですが。

子ども達を見ていて思うのは、「すべてを上手くやらなければいけない」という強迫観念にとらわれているのではないかと、ということですね。これって「ムーリー」です。私が無理と言っただけなのではないか、もしくは無理が、そもそも人間の能力には偏りが在るのであって、だからこそ走るの速い人もいれば、歌の上手い人もいるわけですね。もちろん努力すればそれなりになるのでしようが、みんなが百メートルを十秒で走れるとは到底思えません。ということは、数学も努力すればそれなりになるのでしようが、それ以上は「ムーリー」です。無理な状況の子に必要以上に頑張らせるのは、酷というものです。ならばいつそのこと、自分が活かせられることに力を注ぐ方が、よほど建設的です。できなくても好きであれば話は別ですが、「できないこと」を「できるよ」と、いつまでも追い詰めてしまうのは、命を削るようなものです。劣等感の塊と化してしま

メッセージを送ることがあります。

「気にするな。それであなたのすべてが計れるわけじゃない。数学が得意な者もいれば不得意な者もいる。そんなのは当たり前のこと。みんながみんな、すべてを上手くできるわけじゃない。できることを頑張ればそれでいい。必要以上の劣等感を持たないこと。自分をダメな人間だなんて思う必要はない。そう思うことが、みんなの人生にとってよっぽどもつたいない。そんな思いを毎回頭り返し、積み重ねてはいけません。

頑張らなければ、頑張ればいい。ただし、身の丈を越えた目標は持たないこと。五十点が六十点になればいい。三十点が四十点になればいい。十点が二十点になればいい。もし頑張れないなら、他のことで頑張ればいい。それでいい。」

無理にでも空気を読む(逆KY)すぎて自分を追い詰めるくらいなら、いつそのことKYなくらいがいいというものです。

とはいっても、解らない時間の積み重ねは、「嫌い」を増幅させてしまいかねません。それでも「嫌い」はなつてほしくない。では、できなくとも「嫌い」にはならないような授業とは——。

### 「逆KY」の克服ために

学校の授業が講義形式で、先生が一方的にしゃべりまくっているような授業になっていないか。そんな心配が常にあります。そういう場面も必要

なのでしようが、そればかりになってしまつたら、隣に友達がいるにもかかわらず、まるでいないかのような時間になってしまいます。そんな時間の積み重ねは、友達との「分断の積み重ね」につながっているように感じます。逆にその時間を、友達との「つながりの積み重ね」になつていけば、授業の中で人と人との関係性は生まれていきます。

他の教科でも同じかもしれませんが、解らなければ思考停止状態になります。先生の話も右から左。まったく頭に入つてこないし、残らない。それが小学校の分数からか、九九からか分かりませんが、もうすでに苦手意識で中学校に入学してくる子も多くいます。それでも、その時間が楽しければ、何とか頑張れたりします。でも、一方的に講義形式にしゃべりまくられ、「解る者はついておいで、解らない者は自己責任でそれなりに」というのは、あまりにも無責任というものです。「解らないんだ！」と生徒が暴れても、不思議ではありませんが、逆に暴れないことの方が不思議です。それでも静かにイスに座っている。本当によくできた「いい子」なのになに、全然できない「わるい子」になる。そんなバカな。

教室の友達を、数学という教科を通して知り合ったり、仲良くなったり、信頼や尊敬の気持ちが生まれてくれば、教室に生まれてくる空気は変わってきます。つまり、必要以上に空気を読む、逆KYの必要もなくなつてくるのでは、と思います。